

Павел Тулаев

パーヴェル・トゥラーエフ



ヴィタリー・カヴァリョフ

Виталий Ковалёв

Виталий Ковалев

” СЕМЬ ЛУЧЕЙ В НАЧАЛЕ ЗИМЫ”

ヴィタリー・カヴァリョフ

初冬の七つのきらめき

揺さぶる、冬が大地をゆさゆさ揺さぶる、歴史の後の十五回目の冬が。またもや、いにしえの如く、如月の吹雪、カーテンが吊るされた窓、然れども蠟燭は机を照らしはしない。ぬくもりのない蛍光灯が、わびしげに、味気ない光を放つばかりなり。

羽根ペン、インク壺、なだらかな斜面机...

それらはいずこへ？ かつて、はるか昔、人が詩と呼ぶ魂が、そこには宿り、彼らは生を謳歌し、その暗い内奥にぬくもりすら漂わせていた。そうして詩魂は、いわゆる、高雅な空想の世界へ飛び去るのだが、果たして今日それは謳われているであろうか？ ボールペンが絶妙なきしりを出すことはなく、印刷インクがことばの気品を台無しにしてしまったのであるからして。

初冬を迎えたモスクワで、街全体が、急速な改革により未曾有の混迷にさらされ日々の糧にすら窮乏している最中、パーヴェル・トゥラーエフとかいう人物の詩集が出版された。なかなか地味な装丁に仕上げられた、その詩集は”七つのきらめき”と銘打たれている。”きちがい沙汰だ - とそれを手にした時、私はふと思った、- この陰鬱とした詩情なき御時世に誰が詩集なぞ所望しようぞ？”

果たして簡素な表紙の詩集を手に取り、ばらばらと、わずかに頁の中央のみ活字で満たされている、その一句一句を熟読玩味する。うむむ？ これまで - ほとんど一度たりとも - このての無賴的な著作物に遭遇したためしがなく、はたまた子供だましのトリックと表裏一体を成すかのような頹廢めいた自己満足らしき代物にもお目にかかった覚えがなかった。あたかも筆者の本質から、春の若草の如く、芽を出し自生したかのような詩。時折それは形として節くれたかと思えば、或るときは屈託なく伸び行くかである（故に、リズムは若干乱れ、韻もしばしば乱れがちなのだ）。とはいえ非現実的な空理空論なることばの合成はそこには介在せず、野性的な詩ならではの渋く酸っぱい森の木苺の如き余韻、ちょうど私の友人のそれとよく似た表現がここには感じられるのである。高名な詩人の中には、自己の独創的試練に身をゆだねつつ、限りなく至福の状態を瞑想する達人もいた—

ことばを放たれよう、  
琥珀と菓殻の庭園の如く...

(B・パステルナーク)

だが一体トゥラーエフとは何者ぞ？ 単に、己の殻にこもる好事家であろうか？ それとも或いは、広大なロシアに数知れず存在する無名詩人のひとりなのであろうか？ 然も有りなん。まゝ七年生の卒業アルバムにしたためられる類いとしては上出来であり、うまい具合に一冊の詩集に力作が収められている —

ふたりは海に浮かぶ二隻の舟  
運命はふたりをどこへ投げますか？

日々歳々、ときは過ぎてゆく  
君はいずこへ？ 僕はいずこへ？ —

そして切なく、なおかつ繊細 —

おお！ ラウラよ、すべてのソネットを謳うがいい！  
ペアトリーチェよ、奈落の底へ墮ちるがいい！

かくかくしかじか。正にこの詩人の無邪気さは作品を一読すれば一日瞭然であり疑う余地はないであろう。パーヴェル・トゥラーエフとは — 文学者であり、歴史家であり、翻訳家であり、はたまた、鋭い芸術的センスを兼ね備え、個性豊かな表現力を持つ随筆家でもあるのだ。だがそれが一体何だというのであろう？ その内奥から放たれる、なにやら謎めいた美学とやらがかし出す、ときとして駄作に近いこの純朴たる詩編は一体全体どこから湧き出たものなのであろう？ そもそも、詩集自体からして、その構成ならびに解説からしてこの不可解に対する戸惑いを呈しているのであるからして。

それ故、如何せん、この詩集の開陳に窮するのである。詩集“七つのぎらめき”を解する手掛かりとして今一度この捏ねくりまわされたイメージを敢えて拝借せざるを得ないであろう。すなわち、非の打ちどころのない著者の創作の歩みが刻まれたこの詩集には、詩人としての段状を成した行程が余すところなく網羅され、その不可解かつ欺瞞的なことばの魔術が徐々に頂点に向かって上りつめていく様がうかがわれるからである。概して筆者というものは出版の度に読者とのすこぶる一方的な接触にぶちあたり、それに導かれるまでの屈曲した行程なんざ、大概十中の八九ないがしろにされるのが関の山、となると出版という形は単に凝結した結果にすぎないものであろう。従ってトゥラーエフも同様に自身の詩的創作活動のみならず、あたかも仄めかしであるかのように、その人格、ならびに自身の層を成した世界観を読者の関心に対し提供しているにすぎないであろう。果たして、詩と呼ばれる、この滑稽なことば遊びのすべてにおいて、なにより関心の的であるのは、詩そのものの真実性より、むしろその調べであり、懊悩するその魂こそなのではなからうか？ とところで人格とは何より尊いものであり、自己への前進、すなわち絶対形式であり、真理に従い存在し、仮に尊き人格が心理を超越し布置されるものであるなら、その絶対形式はそれと同等の人格たらしめ、詩的外観を取り得るのである。

トゥラーエフの初期の作品の大部分は、あらまし本書前半に収められ、青春時代特有の衝動性やら、鋭い感受性、ならびに思考やら、外来語や外国の影響などで満ちあふれている。80年代初頭のあの状況下で立派な教育を受けた青年は、のみならず吟遊詩人であり、楽器を奏で、自由奔放な性格の持ち主でもあり、一途に認識視野を拡大しつつ世界に対する関連性をも極め、あの果てなく延々と続いた時代の息詰まる雰囲気の中（これぞ、時代の崩壊！）赤裸々にあえぐのである。一枚の紙にあてどもなくぶちまけられた若き詩人の怒れる魂、それに類した叫びを以て誰があの時代に至るところから漏れ出てくる虚偽を破り得たであろう —

ああ 神様！  
どうか ふたたび  
欺瞞をもたらしたまえ。

虚偽の太鼓を打ち鳴らしたまえ！  
調子はずれのラップを吹きたまえ！

それがため青春時代はあふれるエネルギーとイリュージョンに、ありあらゆる”我々に立ちほだかる欺瞞”に悶々とするあまり、やがて現実からの逃避として、虚構の世界を自己に見いだすかである。ご多分にもれず”七つのきらめき”の著者もかつては革命運動の”小児病”にかかり、チェ・ゲバラに熱狂的に心酔したり、ビクトール・ハラの情熱的な歌の数々を翻訳したり、あげくの果てには他国の幸福のため戦場へ赴こうと、どうやら、祖国では何事も成就し得ない、とその時点ですでに感じていた風である。青二才の珍妙で不可分な死へのあこがれもどきが交錯した正義への渴望、或いは、なにかに取り憑かれたであろう意欲と情熱が世界を再建し得るといった剛毅、トゥラーエフが書いているように、”死と喜びは背中あわせ”のなせる所以であろう。

とはいえ青春時代というものはかく多感旺盛であり、いずれは過ぎ去るという美点を持っているものである。云うまでもなく、トゥラーエフの詩集 - これらの詩編を形成する基本的な核心を成しているのは、翻訳であり、改作であり、近年の散文的小品の数々であり、それら創作物のすべてが、テーマと形式がより密接で調和のとれた協調性を織り成していることであろう。であるから、山あり谷あり起伏があり、初期の作品に比べ、次第に著者の視野が拡がりを見せ、歴史のはるか彼方まで馳せられては、そこになんらかの文化やら哲学めいた息吹までが潜んでいたりするのである。すると素晴らしき - 異教賛歌のすべてに、そこかしこヴェーダの教えであろうか、それともアリア風モチーフであろうかがちらほら見え隠れ、古代スラブ神話に触発されたかの如き靈感に満ち満ちた形式がとられており、はたまたプロメテウスの強烈な影響に基づいたものなのか、古代形象のそれら一連から成る見事なまでの詩編があったりする。或いはトゥラーエフの文体と作風に明らかに影響を与えたと見られる、比類なきスペイン詩風の情感あふれる詩編あり。更に、その他、現在トゥラーエフが携わっている詩的社會評論活動に題材を求めた、ロシア正教にまつわる - 愛国心みなぎる情熱的な調子の詩編と盛りだくさんである。

ところが不意に遭遇したるは十行詩、紛れもなく、日本の五句、短歌と対を成したかのような作品である。その驚くべき簡潔明瞭さに茫然自失の体である。ふむ どうやらそっくりそのまま引用せずして、話を進めるのは難しいと見えた -

いと美わしき窓の外！ 静寂 白き羽の如く  
雪は大地をつつみ 心やすらかなりにけり  
今朝眺めたりは 烏があちこち飛ぶさまよ  
小枝にとまり 雪をどさどさ蹴散らして  
かゝと鳴きては もう一度 黒き羽上げ  
大空めがけ羽ばたき - 新天地求めたり...  
鳥いずこか 飛び去りて かゝかゝだけがこだませり  
小枝はひっそり風に揺れ 心地よく 静まり  
吾自らを律し 如何にかすべきこの心  
”洒落くさい！ 果たしていずこ - 愛とやすらぎ？

私としては、このような十行詩は大変高く評価すべき作品であり、そしてまたトゥラーエフの著書の大半もしかである。とはいえ、かつまた、彼がそうした然るべきものにより空間を満たそうとしている或る種の脆弱な点、私はまた喜んでそれをも赦そうではないか。

トゥラーエフの芸術観形成における主要段階のひとつとしてウラジーミル・ナボコフへの熱病者さながらの傾倒が挙げられよう。20世紀ロシア文学におけるこの極めて大きな現象はソビエト・インテリゲンチヤにとって正に衝撃的な発見であり、以後10年の長きに渡り内輪の解禁読み物としてその確たる齧る中であんよを動かし培われてきた。トゥラーエフは或るときナボコフ文学の一面変わった世界とその驚異的なまでに趣向を凝らしたことばにかくも強烈に惹きつけられ、その響きは心でこだまとなって反芻され、やがて二つのシュールレアリスティックな小品を生み出す惹起となるのである。その一つがあたかも人を煙に巻いたかの如きナボコフの神秘捏造なる原文を題材にした作品である。これら突拍子もない作品に対しても意見述べたくむずむず、ついでながら作品から引用するなら、”物珍しげに眺める。ぼかんと口を開けて。ハエがぶんぶん飛び交い口の中に一匹飛び込む。はたとよく見れば、ハエではない！ 口の中にはにんじん... だがこれは何ぞや、” R-rとL!L!L!”?... くそ、やむなきに得ずか。星印で目がちかちか、星印で... 頭がくらくら... 貢にてこずる...”

貢にてこずる、然れども、めくるなら、そこかしこ、耽美的世界がちらほら見え隠れ、ぱっと消えては、恋愛抒情詩の透明な波が打ち寄せるではないか。だがこれは評論家よろしく分析するなら全く近寄りた代物に相違ないであろう。これらの詩の情感には、幸福が満ちあふれ、なおかつ情熱の限りが尽くされ、神秘的なL. に向かいて赤裸々なまでの告白めいたものが感じられ（というのも、明白に、ここでは全作品が告白体であり）、ことばより先に、ことばが、あたかも岸辺の砂利の如く、なにか泡立つ圧力らしきものに洗われ、太陽に輝いては... かすんでいき、やがて砕けた波が引くかのような風情がある。ここで注目すべきは、海のイメージとは - 詩人が恋愛感情を吐露する場において一貫しているということであろうか -

我が幸福！ 愛、妖精がもたらした！

海から出よ、静かに愛撫する波から

等々。

詩集の巻末に近づき収録された連作”献詞”。ここでは、”異教賛歌”とは対象的なまでの、力強さが徐々にみなぎり、恍惚としたキリスト教的信仰賛歌に変貌していく様相がうかがわれ、あたかも永き彷徨の後、詩人としての揺らめく心の領域を見だし得た感なきにしもあらずである。至極明瞭であるのは新改宗者としての大いなる精神的高揚がここには垣間見られ、のみならずこの章自体がそれまで大部分眠っていた詩編の検舞台であるということであろう。しかし、ここではまた誠実で確信的な力みなぎっているのも否めない。神秘主義的傾向と存在論的象徴性は難解かつ立体的な編み目を織り成し、その糸は虚構 - ことばの膿に編み込まれていくのである。それゆえ仮にトゥラーエフの宗教的詩編のいくつかは派手な闘いを挑むとするならば（一体全体何故に”汝の敵を愛せ、汝を呪う敵を祝福せよ”？）。だがこんな御時世だからこそ、この終末論的時代だからこそ、せめて刹那でも不断の気ぜわしさを忘れ、こんなことばに耳を傾けてもよからうぞ。そこで連作から引用するは、”すべての牆壁を越えて” -

ときは来たりて儂き時世は過ぎ去り、  
悪魔のぶらんこは奈落の底へ、  
審判はひとり残らず長旅へ召される。

山の彼方で偽りと万年吹雪が  
天使の小さな羽根を別世界へと誘い  
見えないよう、さっと運び去る。

さて、どうやら、こちら辺で、パーヴェル・トゥラーエフの最近刊行された著書に御託三昧並べるのも尽きるとしよう。小鳥は詩魂の空へ飛び立ったと... そこは如何なるところぞ？

そうだ、すんでのところでは忘れるところであった。何故に”七つのぎらめき”なのかいな？ 同名タイトルの詩編を考慮せず、この詩集の銘句として解釈案を出すとするれば、こういった見方もできよう。すなわち、七つのぎらめき - これぞきみ、パーヴェル・トゥラーエフ、その人格なり。きみから細胞分裂した同一の神々しい光が色彩豊かな虹と化したのであろう。これぞ神が我らにお与えくださる唯一無二の慈愛の精神のスペクトルではなからうか？

モスクワにて、1994年 如月

Перевод на японский: Михо Танака

Токио, февраль 1997

(日本語訳: 田中 美保 東京にて、1997年 如月)



パーヴェル・ヴラジーミロヴィッチ・トゥラーエフ

I

1. " Семь лучей"  
" 七つのぎらめき"
2. " Гимн времени"  
" 時刻の賛歌"
3. " Гимн Сварогу"  
" スヴァローク賛歌"
4. " Л!"  
" L!"
5. " Как за окном хорошо!"  
" いと美わしき窓の外!"
6. " Алкинос"  
" アルキノス"
7. " Татьяне К."  
" タチヤーナ・Кに"
8. " Открытка в Санкт-Петербург"  
" サнктпетелブルグへの葉書"
9. " Парад"  
" パレード"
10. " Песня рискового парня"  
" ならず者の唄"
11. " Песня советского солдата  
в Афганистане"  
" アフガニスタンのソビエト兵の唄"
12. " Удивительная история про  
Ивана Ивановича Догмачева"  
" Иван・イワノヴィッチ・ドグマチェフの不思議な話"
13. " Как ко мне приходила хорошенькая С."  
" なぜ忌まわしいSが現れたのか"
14. " Романс о жестокой любви"  
" 苛酷な愛のロマンス"
15. " Люблю тебя..."  
" 愛してる..."
16. " Смешная скала"  
" 可笑しな岸壁"
17. " Твои очи—две светлые ночи"  
" きみの瞳はふたつの輝く闇"
18. " Алкиона"  
" アルキオーナ"
19. " Ласточке"  
" 燕よ"
20. " Михо Танаке"  
" ミホ・タナカに"

Стихи: Павел Владимирович Тулаев

詩: パーヴェル・ヴラジーミロヴィッチ・トゥラーエフ

Перевод на японский: Михо Танака

日本語訳: 田中 美襟

” Семь лучей ”

セミ・ルチェイ

広大無辺なる天により  
婚姻の秘を告げるため  
生命の片鱗をなめ尽くす  
炎の前に 悶絶の闇をとき放つため  
セミ・ルチェイ 魂を清めたまいたる  
矢の如く われは不吉な暗雲に投げ放ち  
七粒の真珠を麗人の肩に懸け  
一連の首飾りに

” Г и м н В р е м е н и ”

## 時刻の賛歌

時刻、数多 無限なる時世をもたらし、  
時刻 — 汝 倦むことなき馬、無窮の飛脚。  
汝 忠実なる天体を正確に輪転し、  
重力をものともせず 乗り越える。  
汝の中心は — 神気なる種で満たされた無限の大型、  
天空は汝の種を呼び覚まし、地上で発芽させた。  
凡て、地上になきもの、これ 無謬の時刻がもたらし、  
凡て、予期せずして、熟れた種が、宿命をもたらした。  
慈悲深き善なる庇護聖人は、雷神と共に出現され、  
信心深き者 — 甦る復活者、忌まわむべき者 — 審判 と定め、  
その翼は創造する者と詩人の心を昇華し、  
現世を超越し我らを永遠に誘いたまう！

## スヴァローグ賛歌

父なる一天、至高なる神、  
光と闇を与えたまう、  
安らかなる創造主。  
汝の息吹は一風、  
汝の瞳は一星。  
汝は天と火をもたらし、  
太陽に黄道を導き、  
火の馬を遣わされた。  
己の牙により 汝 大地を見出され、  
河川をもたらし湖を生み出された。  
汝自ら一山々と泉が出現され、  
やがて犁と鉄を授けたまわれた。  
汝 邪悪な蛇に打ち勝たれ、  
夫には一妻 を定められた。  
汝は生命を育む 母なる - 湿润の - 大地を、  
如何なる時も揺るがしたまう。  
汝、父なる一全能の神に、  
我ら いつの世も供物を捧げ  
そして祈りを捧げよう。

” II ! ”

L !

もしも 一列に大文字で  
七つのLを書いたなら ー  
L . L . L . L . L . L . L . ー  
素敵な詩になるだろう

” Как за окном хорошо ! ”

## いと美わしき窓の外!

いと美わしき窓の外! 静寂 白き羽の如く  
雪は大地を包みこみ 心やすらかなりにけり  
今朝 眺めたりは 烏の飛ぶさまよ  
小枝にとまり 雪をどきどき蹴散らして  
かゝと鳴きては もう一度 黒き羽広げ  
大空めがけ — 新天地求めたり・・・  
烏いずこか 飛び去りて かゝかゝ だけがこだませり  
小枝はひっそり風に揺れ 心地よく 静まりかえり  
吾 自らを律しては 心 戒めん  
” 洒落くさい! 早々に見つけたものか — 愛とやすらぎを?”

” Алкинос ”

## アルキノス

よく晴れた寒い  
素晴らしい一日だった  
しかし はたと考えた  
《大吉など有り得ない》

きみの声はやさしく響き  
一度にすべてを投げ出した  
しかし はたと想った  
《ご好意ありがとう》

公園の側を通りかかると  
ワルツが流れてきた  
それで はたと浮かんだ  
《これもまた 好い前兆》

きみは そっと近づいて  
顔をしかめていたけれど  
すぐに打ち解けたっけ  
僕はそいつが嬉しかった

一体どこから来たんだい？  
きみは僕をすべてお見通し  
そして心から接してくれる  
きみは誰？ これは宿命かい？

これしきの出逢いに  
すっかり酔いしれ きっと  
きみの虜になっただろう  
別れ際 云ってくれなかったなら

《わたしには夫がいるの》

” Татьяна К. ”

## タチヤーナ・Кに

ただいま 愛しいタチヤーナ  
我に返りつ きみの詩を読みかえず  
ふたりは — 旅路ではぐれた渡り鳥  
引き裂かれた痛手に鳴き叫ぶ

瞬く間に錆びつく肉体  
一夜の幸福を待ち侘びて！  
愛の懸け橋はもろく  
かく儂き 秋の暁のよう

ひとつの愛 永えに唯ひとつ  
それは偶然の出逢いの始まりではなく  
剣の如く 死に蝕まれた肉体を討つ  
熱く眩い 天の光のよう

昨日 どぎまぎ言葉を忘れたのは  
やさしいきみに魅せられていたから  
素晴らしい きみの瞳！ —  
それは曇ることなき一筋の光

今日 再び記憶は心を掻き乱し  
新たなる想いと希望の波が駆け巡る  
沈黙の叫びが ふたりの時を  
怯むことなく 刻むだろう

明日？ ふたりで心ゆくまで  
甘い時間をすごしたいが  
新たなる悦びが心を満たし  
慰めとなるだろう

## サンクトペテルブルグへの葉書

＜一体だれが考えるだろうか？

鳩色の小川の

いや 或いは もしかしたら

黒い小川のでさえも

(あなたは—忘れてはいなかった！)

揺るがぬ 蒼い波は

つめたい花崗岩によするには

くたびれていた

岸にあたり砕けた

蒼い - 蒼い きらきら輝く

紺碧の天藍石

鏡の反射が帆柱を

微かにきらめかせては

そこにさざ波たゆたい

真実を守りぬいた

心のせせらぎが

不意に昂揚しては

紙の上に言葉が

ぶちまけられる

果たして如何に？

現在しあわせで前向きに

暮らしている と>

そこで なにより肝心なのは—

言葉をこねくる生業に

なんら恐れなしってこと

光 — 神

道 — 愛

白 — 無垢

緑 — 大地

心をこめて贈ろう

(後でどうなろうと構うもんか！)

とにかく 微塵も恐れなし

それでも姉さんは—疑心暗鬼！

ならばいっそ—

姉さん あなたの心を

むさ苦しいファイルに

これじゃ まだ駄目だろうか？

” П а р а д ”

パレード

通りを高官が練り歩く  
元K P S Sなる人物が  
傍らに一度し難き偽善者  
これも—K P S S  
並びに一悪辣な党オルグ  
最たる—K P S S  
隣には狡智たけた太鼓持ち  
古参K P S S  
その他 群衆  
すべて—K P S S  
アル中—K P S S  
放蕩者—K P S S  
道楽者—K P S S  
怠け者—K P S S  
臆病者—K P S S  
強欲者—K P S S  
無責任なる輩 詐欺師 闇屋  
凡庸なる芸術家—音楽家もどき  
無知蒙昧なる検閲官 へぼ詩人  
三文小説家 密告者 死刑執行人  
狂信者 饒舌家に気取り屋  
犯罪者 収賄者 窃盗犯・・・  
いやはや きりがない  
然れど皆—K P S S

と 同時に 僅か向こう側  
仲間と軽快に歩く人あり・・・  
手短に云うとするなら？  
巧く描写するなら？  
うむ ありふれた人なり  
手には—電車の切符と  
小冊子 笑顔で—すがすがしい  
だから きっと 共産主義者じゃないだろう

## ならず者の歌

《己の信念 — それは肝に命じておけ。》

民衆の英知

《ねえ、— と母が云う。—  
お前は どうして そう頑なに我を通すんだい？  
自分の考えは胸にしまっておいて、  
口は慎んだ方が 良いよ。》

そこで母に《忠告、ありがとう。  
ただ黙ってることができないんだ。》

《なあ、倅よ、— と父が云う、—  
お前は利口者じゃ。そこで云っておくが  
世間に出たら余計な口出しはするなよ、  
さもないと、身を滅ぼすからな — 分かったか！》

そこで父に《忠告、ありがとう。  
ただ口出しせずにはいられないんだ。》

《あのさ、— と友が云う —  
君とはあらゆる点で同感さ、だけど  
一つだけ違う点があるんだ。  
つまり・・・用心しろ — ということかな。》

友よ、そいつは、尤もだ。用心に越したことはない。  
だけど何から何まで用心するのは — 行き過ぎだよ。

《ネェ、— と彼女が云う。—  
あなたが大好きよ。だけど、いつになったら  
私に素敵な贈り物と家をくれて、  
ふたり、しあわせに、暮らせるのかしら。》

《きみが大好きさ、— と彼女に鸚鵡返し。—  
ただ二人は一緒に暮らさないだけさ。御免だね！》

《一寸お聞きなさい、— と大尉が云う。—  
末恐ろしい若者よ。あんたは — ならず者じゃ。  
ひとつ このわしに洗いざらい話してくれんか！  
そこで大尉に《しばらく黙っていてもいいかい？》

## アフガニスタンのソビエト兵の唄

### 戦闘直前

もしも俺の命が死に神によってなぎ倒されるなら、  
もしも真っ正面から弾丸を喰らって殺られるなら、  
俺は所詮ついてない運命にあったのかも知れないし、  
否、恐らく、天罰が下っただけのことだろう。

どうしてだか俺は自分の命なんぞ惜しくないし、  
第一ここへは来たくてやって来たんだ。  
唯やりきれない気持ちをどう隠せばいいのか、  
夜な夜な屍の十字架を見るのが辛いだけ。

### 繰り返し

俺は今日 戦闘へ、俺は今日 戦闘へ出陣だ。  
敵に向かって一日の出とともに、  
だから、きっと、俺を待つのは無駄だろう、  
否 もしかしたら、無駄じゃないだろうか。

もしも突然 終わりが、不意に死が訪れても、  
俺の痛みは一度きりで永遠に消えるだろう、  
唯おふくろは俺の計報をどう受け取るだろう？  
ひとり残されたおふくろはどうなるのだろう？

### 繰り返し

俺は今日 戦闘へ、俺は今日 戦闘へ出陣だ。  
敵に向かって一日の出とともに、  
だから、きっと、俺を待つのは無駄だろう、  
否 もしかしたら、無駄じゃないだろうか。

” Удивительная история про  
Ивана Ивановича Догмачева”

## イワン・イワノヴィッチ・ドグマチェフの ふしぎな話

イワン・イワノヴィッチ・ドグマチェフが、  
どうして己の姓を授かったものか、  
自ら外套を、新しい外套を、  
古い生地で仕立ててただけで。

イワン・イワノヴィッチはひたすら外套を縫う、  
長いこと座り続け、針と糸でちくちく、  
朝から晩まで、立つことなく座り続け、  
家に籠もったまま、座り続けてちくちく。

ただでさえ仕事がたくさんあるのに、  
イワン・イワノヴィッチは外套に夢中、  
すべてを忘れ、身のまわりのもの —  
扉や窓さえ目にはいらなかったとき！

どのくらい時間が過ぎたろう、誰も知らずに。  
おそらく一カ月？或いは一年？それとも もっと？  
皆がいうことにゃ、あっぱれ 彼の身の上に  
驚くべき出来事が、起きた ということだ。

それはなんでも、よく晴れた日のこと、  
ぐずついた天気も、どうやら 失せた一日。  
中庭で甲高い鳥の声がしたかと想えば  
木の葉は楽しげに風にたわむれていたとき。

すると突然 太陽の光が家中に差し込んだと！  
まるで心地よい音色が満たすかの如く！  
そこでイワン・イワノヴィッチの前に現れたのは  
一糸まとわぬ美しい娘だったとき！

これには打ってつけの言葉が見つからず、  
なにしろその美しさは何にも譬えようがない。  
それほど一糸まとわぬ不思議な訪問者は  
世にも稀な別嬪さんだったとさ。

春のそよ風のように、清々しく、  
明るい太陽のように、ほほ笑み、  
初雪のように、ぬけるような白さ、  
おまけに白鳥のようなしなやかさ。

《娘さんよ、なんだってここへ来たんだい？》、—  
イワン・イワノヴィッチはおったまげたとさ。  
《まさか、押し掛け女房、ってな訳じゃあるまい、  
さぁ行った行った、仕事の邪魔しないでおくれ。》

不思議な娘はだんまり一言もくちをきかず、  
黙りこくるばかりで、返事もしやしない。  
ただ ただ二つの目を大きく見開くばかり、  
と思いきや イワン・イワノヴィッチに歩み寄ったとさ。

乙女の柔らかい胸はしなやかに揺れ、  
滑らかな背中生き生きと動き、  
艶やかな大腿はぶるぶるふるえ、  
亜麻色の髪は波を打ちはじめた と。

《なんのまねだ、この恥知らず》、—  
イワン・イワノヴィッチは怒鳴りつけたとさ。—  
《なんだって お前さんは裸でここへ来たんだい、  
さぁ 仕事の邪魔だ、とっと と行っとくれ！》

不思議な娘は またしても黙りこくり、  
なんにも云わず、なんにも答えなかった と。  
ただ花びらのような唇がほんのり開いて、  
真珠のように白い顔が ぼっと浮かんだとき。

しまいにイワン・イワノヴィッチは おっかながって、  
一心不乱に両手を振りまわし始めた。  
《かっ神様お助けくださいませ、どうか、後生です！  
魔物をおっ払ってくださいまし》、と 叫んだと。

光り輝く不思議な娘は首を横に振り振り、  
呆れたと。そして三度 だんまりこくったと。  
それから ただただ雪のように白いその手を  
イワン・イワノヴィッチにさしのべた と。

イワン・イワノヴィッチはおったまげ、  
そそくさ両手で自分の目をふさいだと。  
するとどうだ、根っこが切れたように、ぐらぐら揺れだし、  
そのとたん気を失って ぼったり倒れてしまったと。

それから三日目に目を開いてみると、  
辺りには人っこ一人いなかったと。  
ただ風が吹き、枝が窓ガラスを叩いては、  
どしゃぶりが ただ窓を打つばかりだったとき。

” Как ко мне приходила хорошенькая С. ”

### なぜ 忌まわしいSが現れたのか

ところで、彼女が俺のところへ馳せ参じたのさ、  
じれったそうにドアを とんとんとん ノックして。  
俺は窓の外を覗いてみたけど、初めは彼女が分からなかった —  
なにしろ美人で、若くて、  
おまけに笑みを浮かべて輝いてる！  
嬉しそうに俺の目をみつめてだぜ！  
窓にこっそり駆け寄ってきたから、  
入れてやったのさ。すると 彼女の  
熱い唇が俺の唇に吸い付いた。  
ほう、なんと彼女は俺にキスしたのさ！  
なんと 瞳を涙でうるませて！  
そして俺の耳元でひそひそ囁いた  
《わたしは — 死に神。だからあなたの処に来たの》。

## 苛酷な愛のロマンス

えい、お聞きなさい、皆の衆  
哀しい唄を。  
愛をうたおう、皆の衆、  
愛をうたおう。

或る処に少年がいたとさ  
まだ ほんの若僧が。  
陽気に、屈託なく、  
暮らしていたとさ。

ところが この若僧  
うぶな娘に惚れたと。  
そこで うぶな小娘は  
誘惑しよう と決めたとさ。

物憂いまなざし、魅惑的な媚態を  
若僧に投げかけちゃ、  
すっかり夢中にさせて、  
ぼっ とさせたと。

抱きしめ、接吻をしちゃ  
言ったとさ  
《愛しい、わたしの恋人、わたしは、  
あなたのもの。》

小娘は若僧からすっかり  
意志と理性を奪っちゃったと。  
あげく彼女の足許に這いつくばり、  
若僧は言ったとさ。

僕は、なにかも忘れて  
すべてを捨てよう。  
君ひとりのために僕は生きるよ  
愛する君のために。

僕は決して君を嫌いにならないよ  
こんなに愛してるんだもの。  
だから、君が望むなら、なんだって  
僕はやるよ。

そこで小娘は言ったとき  
高慢ちきに。  
ねえ それなら、何処か遠くへ. . .  
行ってくれない。

あなたと気晴らしするのは  
もう うんざりなの。  
いっそのこと、目の前から、  
とっと と消えてよ！

あたかも、刃物のような言葉で、  
小娘は若僧を打ちのめし、  
そして、若僧は、我に返ると、  
小娘に言ったとき。

なァに、それなら、僕は行くよ。  
それに 君なんか一恋人なもんか。  
もう金輪際、君と遊ぶのなんか  
ごめん だね。

そして若僧は、目をふさぎながら  
立ち去ったとき。  
涙を拭いながら、否 泣いたんじゃない、  
涙が出たから拭いただけ。

” Люблю тебя . . . ”

愛してる、狂った夢見心地で  
ふたりの時間を 私が幸福にうたえば、  
きみの眼差しは輝き きみの痛みは  
涙が、悦びに変えてくれるだろう。

愛してる、春の朝 きみの姿が  
私には かすかに 光り輝く時、  
愛してる、浮遊しながら、聡明に  
きみは その貴い光りを与えてくれる。

愛してる、逢瀬のたびに きみは輝き、  
いたいけな胸を焦がし 私を待つなら、  
こんなにも脆弱な私の肩に  
きみはうなだれ、腕を垂れる。

無邪気な、悪戯をしばし 忘れ、  
きみが衣装を誉めそやすなら、  
ふたりの上品な会話の合間に  
きみは祝いの宴を繰り広げる。

愛してる、きみが 爪先だちで  
私のところへ、こっそりと  
可愛く、愛想よく、近づく時—  
なんと愛しいきみ。

” Смешная скала ”

## 可笑しな岸壁

ちょっとご覧なさい、なんと可笑しな岸壁だろう！  
一体全体どれだけの海水が  
その岸壁にあたり  
砕けていることだろう、  
で 岸壁は、－  
あたかも唾の如く、  
じっとしている  
素早く 飛び行く鳥たちの鳴き声ですら、  
岸壁は小石さえも  
失いつつあるのに。

” Твои очи — две светлые ночи ”

## きみの瞳は ふたつの輝く闇

きみの瞳は ふたつの輝く闇。  
奈落の底に突き落とされたよう！

きみの瞳は ふたつの輝く闇。

きみの腕は 難攻不落の断崖。  
私はおおいなる極みに苛まれる！

きみの腕は 難攻不落の断崖。

きみの肩は 白い雪の湿原。  
闇までも雪に埋もれたら！

きみの肩は 白い雪の湿原。

きみの囁きは 澄んだ小川。  
私は 絶えず、そこを泳いでいく。

きみの囁きは 澄んだ小川。

” Алкиона ”

## アルキオーナ

湖底を清水だけで  
潤すがいい。  
海面を涼風だけが  
吹くがいい。  
夜陰に静寂だけが  
広がるがいい。  
その時、  
そこに きっと  
瞬く間に  
アルキオーナが  
やってくるだろう。

” Л а с т о ч к е ”

## 燕よ

愛らしい燕よ、  
なんと可愛く、愛らしい！  
どうして打ち明けずにいられよう、  
私が愛しているのは—

それは きみ。

きみは いつも飛びまわる  
日ざしを浴びて、清らかに。  
羽ばたくたびに傷つく  
物言わぬ、きみは、

私の希望。

きみよ 私を苦しめるなかれ  
せめて、束の間でもいい。  
苦しめるなかれ、  
苦しめるなかれ。

私の相棒よ。

きみは私のしかけた罠に  
飛び込んでくるだろうか？  
それとも暗雲たれこめる  
空に飛び込むだろうか

独りで？

燕よ 私の手にならば—  
永遠の虜になるがいい。  
そうして きみは  
昼も夜も

私と一緒に。

いや 燕よ 飛びまわるがいい  
仲間と一緒に。  
果たしてこれが最善なのか、  
それとも最悪なのやら—

私の人生。

” М и х о Т а н а к е ”

ミホ タナカに

心に 身体に 意志に  
激しい衝撃が生じるのは  
聖なる証しが  
生命の水を降り注ぐ時

妙なる賜物により  
運命が授けられ  
愛に咲く花が  
宿命のシラリにされる時

愛しいアルキオーナ！  
汝 新たに波間をひた走り  
我が切り断った岸壁めざし  
貞淑な燕となり飛んでこい

此処は天—幾多の広き道  
天使と十字架の楽園  
至高なる神が得も云われぬ  
紋様を丹念に織り成す

此の—広大な草原の真ん中  
ラ—ダの緑の大地で  
農夫は麦を刈り取り  
蜜柑は太陽を浴びて輝く

此処では蝶の群れが軽快に  
市松模様の草原を飛び廻り  
海の向こうの訪問者たちが  
速い帆船で旅立つ

此処に芸者が花を手に  
神道の象形文字の如く聡明に  
桜の小枝の如く 雅やかに  
絹の和服を纏い佇んでいる

此処には富士山の如き  
逞しき侍魂が宿り  
勇猛果敢なる 其の精神は  
我に大いなる息吹を与える

我 そよ風のごとく 心やさしく  
大海原の如く—強き者になろう  
如何なる時もネプチューンが  
我に授けた七ツの閃きを以て

アルキオーナ 聞こえるかい？  
貞淑な小鳥よ 聞こえているかい？  
ふたりで一緒に素晴らしい人生を  
一目散に駆け抜けていくんだ

心に 身体に 意志に  
激しい衝撃が生じるのは  
聖なる証しが  
生命の水を降り注ぐ時

1995年11月18日

パーヴェル・トゥラーエフ  
П а в е л Т у л а е в

## II

1. "Монолог московского хиппи"  
"モスクワヒッピーの独り言"<sup>モノローグ</sup>
2. "Рассказ старого шофера"  
"老運転手の話"
3. "Пьяненький в метро"  
"地下鉄の酔っ払い"
4. "На смерть Л. И. Брежнева"  
"L. I. ブレジネフの死によせて"
5. "Один, два, три — подвиг!"  
"いち、にい、さん — 功績!"
6. "Рассказ комсомольца Вовы К. о том,  
как он подрался из-за Революции"  
"コムソモール員ヴォーヴァ・Kが革命のために闘争した話"
7. "Сиреневый бантик"  
"ライラック色のリボン"
8. "Речь ганьбу"  
"カンブー演説"
9. "Незнакомые"  
"見ず知らずの人々"

Стихи: Павел Владимирович Тулаев

詩: パーヴェル・ヴラジーミロヴィッチ・トゥラーエフ

Перевод на японский: Мико Танака

日本語訳: 田中 美保<sup>ミエホ</sup>

モノローグ  
モスクワヒッピーの独り言

俺の身の上話をしよう。

やおら早めに起き、といっても既に午前11時、  
飯時までにジーンズをひっぱり出すのさ。  
やれやれ、やっこさ、そいつをはいたら、  
仲間のところへ出動だ。地下道では

仲間が俺を待ち侘びている。

しょっぱなにいくわしたるは我らが民警<sup>ポリス</sup> —  
正義の味方！ 我らの治安を防護する！  
ヤツと並んでつっ立つは仲間たち —  
ルイジーに、レンカと俺の彼女だぜ。

俺に愛想よく手を振っているときた。

抱き合っ<sup>ストリート</sup>て街の通りをぶらつきながら、  
<sup>むな</sup>虚しい人生とやらを眺めるのさ。  
浮かれる俺たちに道行く連中のむっとした視線が  
注がれる、一体なんてざまだと言いたげに —

破れたジーンズと肩まで伸びた髪<sup>ヘア</sup>に。

そう、道徳と価値 — そんなものバカげている。  
所詮なんの値打ちもないとするならば。  
いずれは忘れ去られ葬られてしまうだろう。  
ただひとつ確かなのは — 愛し合えば戦争はない。

こいつはいい、たとえば、殺し合うよりしました。

おや もう夜かい、ぶらつく元気もないはずだ。  
俺たちは金持ちのブラチノのおごりで  
《カフェ》へ、五人でスティックにカクテルと  
洒落こむけれど、長居は無用サッサと家路につくのさ、

なにしろ至る所で追い立てられるときゃ、かなわない。

なあに、構うもんか。俺たちには仲間がいるんだからな。  
そこでしたたか酔っ払うためポーバの家めざして  
てくてく、んで、渋い往年のブルースを聴きながら、  
ソファーに横たわり、葉を打つって訳なのさ

俺はいずれこの風変わりな世界ともおさらばするだろう。

## 老運転手の話

わしは哲学なんてものとは全くの無縁。  
だが神様は、眼力を、このわしにお与え下さった。  
かてて加えて地獄耳ときちゃ、怖いものなし  
あとは年の功とやらの分別ときた。

学問放棄 — こりゃ全くの災難じゃった。  
内輪の仲間-インテリゲンチヤの秘密とやらじゃ。  
酔っ払って民警のご厄介になるとわしはいつも  
決まって、あの日のことを懐かしく思い出すのが常じゃ。

云わば、あれは、そりゃ、もちろん、他愛もないこと。  
わしから罰金とやらをふんだくったぐらいのことじゃ。  
ただ半年ともに過ごした学校の若い衆とはもう  
あれきり挨拶を交わすことすらなくなってしまったが。

で、全く、<sup>ラゲリ</sup>収容所のなにを思い出したというんじゃ？  
ああ、そうじゃ！学問は受けられなかったということじゃ。  
それでわしは始めから運転手ではなかったのじゃが、  
人生浮き草稼業よろしく転々としている始末じゃ。

今をさかのぼれば遠い1930年代  
スターリンが巧妙に共産主義を建設したおかげで、  
モスクワから永遠に訣別するかのごとく、半永久に離れたまんま  
すべて祖国のためよと額に汗して働いたもんじゃった。

それから戦争、そりゃ、昨日のこのように覚えとる。  
そいつはぱっくり口を開けた傷となって心に残っておるわ。  
なんとも、うまい言葉が見つからんのじゃが...宵の酒をちびりながら  
老いに鞭打ち、あとは時が過ぎていだけじゃ。

おやおや、またかい。どうにもこうにも思い出もろく  
はるか若い時分が無性に恋しくていけねえ。  
あの時分を懐かしく思い出しちゃ、ほろ酔い気分に涙をぼろぼろこぼし  
とめどなく日頃のうっぶんにくちをこぼす始末じゃ。

ほらまたじゃ！まったく呆れたお喋りがいたもんだ。  
一体どうやって振るまったものやら — さっぱり分からん。  
このとおり、わしはいつだって一つことを始めちゃ、  
終いには一番大事なことを忘れるってな始末なんじゃ。

はたして一番大事なことは — 然るべく口先では云えんのじゃ。  
そいつは心根で感じるものだけに時に難しいものなのじゃ。  
ああ — 何もかも根こそぎ取っ払えたらせえせえするじゃろうに！  
ただ分からんのは、そいつがそんなに大切じゃろうか？

”Пьяненький в метро”

## 地下鉄の酔っ払い

小汚い — 真っ赤な襟巻き、  
ネズミ色の外套、  
しわくちゃの帽子 —  
地下鉄の酔っ払い。

よろめき歩く、そのさまは、  
この祖国くにのよう。  
自業自得だということすら、  
気が付いていない。

## L. I. ブレジネフの死によせて

然るべき事態発生。  
病床人は、  
既に昨日から半死半生、  
老衰のため心臓の動悸かなり激しく、  
もはや子種すら無く不毛なる、  
国家元首であり、  
日陰者なる売春婦の、  
庇護となり、  
尊大なご機嫌取り、  
お為めごかしの  
偽善的支配者、  
その寄せる年端にはとうとう勝てずして、  
終に永眠した。  
孤独なる王座。  
葬儀らしきものはなく、  
深い悲しみもなく、  
しらけた空気の中、  
不快な、無神経でしかない、奏楽が始まり、  
回廊の慌ただしい喧噪や、  
扉を叩く音や、  
万年筆の軋る音や、  
乳白色の紙の  
めくれる音やらが  
裏切り者たちの悲嘆にくれる姿や、  
ごますりどもの哀歌や、  
用心深い小心者どもの  
その場を取り繕った静寂やらが、  
暴徒たちの笑みと  
渾然一体となっているのだった！

やじ馬の烏合の衆よ、  
口をあめぐり開くがいい！  
テアトルは入場無料 —  
さぁ見放題！  
忽ち大広間は物見高い連中で  
大入り満員すし詰め状態。  
すでにスポットライトが舞台に —  
スタート。  
オーケストラは準備完了 —  
指揮。  
そうして主役は  
ふ厚い緞帳の向こう側で  
すでに101回目の舞台を演じている  
ベテラン…

然れど俺の詩<sup>うた</sup>は  
未だここじゃ謳<sup>うた</sup>われない。  
俺のころは  
怒りに燃えて  
白い紙に、  
静かに情熱的にぶちまけられ、  
唯ひとつ可能なことは  
叫ぶことのみ。  
ああ、神様！  
どうか ふたたび  
欺瞞をもたらしたまえ。  
虚偽の太鼓を打ち鳴らしたまえ！  
調子はずれのラッパを吹きたまえ！  
スペクタクル、  
スペクタクルをもう一度  
繰り広げたまえ。

”Один, два, три — подвиг!”

いち、にい、さん — 功績!

(ヴォズネSENSキーのパロディー)

いち、にい、さん —  
よし!

何故ぼさっとつつ立っているんだ?

いち、にい、さん —  
よし!  
功績!

おい、何を突然ためらっているんだ?  
さあさあ!

いち、にい、さん —  
よし!

具合でも悪い、そうなのか?  
それとも怖いのか?

功績!

盗みをはたらいたか?  
いち、にい、さん —  
よし!

おい、どうしたってんだ?  
一杯食わされたか?

よし!

功績!  
功績!  
功績!

” Рассказ комсомольца Вовы К. о том,  
как он подрался из-за Революции”

## コムソモール員 ヴォーヴァ・Kが 革命のために闘争した話

きのう クラスの友達と  
派手に言い合いした  
きのう グループの同志と  
口汚くののしり合った  
それは自尊心からでもなく  
決議のこともなかった  
俺達は警察沙汰になる程  
革命のため殴り合った

俺は言う《ヴィーチェック、  
だって君は自然分解を  
防げないじゃないか。  
俺は決して指導者じゃないが、  
こうして君と、とことん  
墮落に心を許さないため論じているんだ。

別に、この俺には、君の服装なんて、  
なんだろうと構うもんか —  
スポーツシャツに、ジーンズだろうと。  
厚底の短靴を履くか履かないか —  
肝心なのは、わらじの寸法なのさ。  
俺には — サファリでも普段着でも同じさ。

君は言う、髭を生やしていないと  
まるっきり青二才みたいだって、  
でも髭を生やせば、男前 — 髭を剃る手間もはぶけるって、  
だけどこれは — バカげている。  
俺としては — 髭を剃ってもらいたい、  
だが君は — 下半身までむく毛を伸ばしたいだとき。

いや、友よ、こんな話じゃないんだ。  
ケンカする気は毛頭ないんだ。  
肝心なのは格好じゃなくて — 中味なんだ。  
だってマルクス、レーニン、トルストイ、  
皆こぞって髭を生やしていたし、  
イギリスでは皆ジーンズを履いているじゃないか。

友として君は俺を傷つけたんだ —  
ちくりと当てこするかのように、  
そう 君は俺の燃えたぎる情熱にツバを吐いたのさ、  
ついこのあいだ、なにげなく  
君は言ったね、俺を — バカだって、  
俺が共産主義とやらの威力をわずかに信じただけで。

そして俺の信念にビクともしなかった。  
君は相変わらず、ふざけるでもなく —  
俺をまるっきりバカにして非難したんだ  
つまり、なぜ俺たちの祖国<sup>くに</sup>じゃ  
ジーンズは縫われず、ともかく、  
ヒッピーは迫害されるんだらうって》。

俺は黙り込み、であっちは答える  
うすら笑いを浮かべきっぱりと俺に言う  
《なんだって君は、イデオロギーなんだい？ バカげたことはよせよ。  
なあ、ヴェトナム人が戦争をやめたら、  
或いはコルバランが釈放されたら  
一体だれにツバを吐きかけるのか言ってみろよ》。

俺は我慢ならず — ヤツの面を  
思いっきり殴ってやった。  
ヤツはよろめき果然と立ちすくんでいた。  
しかし透かさず我に返ると、  
仲間がヤツに加勢して  
俺を半殺しになるまで殴った。

## ライラック色のリボン

明るい-ライラック色の晴れ着を  
(ああ、なんたる不幸!)  
心に描いて-夢見るリボンは、  
愛らしく、無邪気であった。

彼女は、こう、考えていた  
自分の姿に皆ため息をつくだろう—  
だから一番素敵に晴れ着に  
私をつけてくれるだろう。

汚れを知らない、一途で無垢なりボン!  
確かに、きみは間違っていない。  
誰だってきみの艶やかな姿を見たら、  
一度でまいってしまうだろう。

ところが、或るときリボンは出会うのだ  
なにやら得体の知れない書物と  
(憐れむべき姿と化した  
ライラックの花が描かれている)。

書物はそばを言ったり来たり。  
やがて書物は束にされたではないか!  
そして鞆の陰にかくれてしまった。  
(鞆は、幸いにも、隣りに並んでいた)

おばかさん、リボンは恐れおののく。  
書物は、しかし、リボンが考えるより、  
ずっと賢く、その証拠に書物はリボンを  
試していたという次第。

それでリボンに淡い恋心を抱いたと。  
果たして行く末は如何ばかり? リボンは  
決めたとき、不幸な人生を恋人と歩むべく、  
己を解こうと — 思い立ったとき。

リボンは今いずこ — さあ分からない。

”Речь ганьбу”

## カンブー演説

《カンブー貴兄は即座にお分かりだ》

中国の新聞から

私は満足し何不自由ない。  
私は我が人生を謳歌している。  
何故そちは面白くないのか、  
仮に私が褒めたたえても？

私にはなすべき職務がある。  
なすべき事はそちにもある。  
何故そちは面白くないのか、  
仮に私が職務に甘んじても？

私には快適な住まいがある。  
住まいはそちにも当然ある。  
何故そちは面白くないのか、  
仮に私が住まいに満足しても？

私には豊かな食卓がある。  
食卓はそちにも当然ある。  
何故そちは面白くないのか、  
仮に私が食卓に満足しても？

我々には如何なる障害もない。  
そちは — 人民。私も — 人民。  
何故そちは平等が不服なのか、  
仮に、この私が享受しても？

そちは按配悪く猫背になるのか？  
何故 腹がへこんでいるのか？  
それは私の知る由ではない。  
断じて！

” 不 知 者 ”

## 見ず知らずの人々

絶えず流れる市井しせいのひとつみ、  
馴染みの並木道の静けさ、  
雨に打たれ、朽ち果てたベンチに、  
私は見ず知らずの人々を見る。

バラ色の歯茎はぐしを剥き出して  
私に微笑みかけるお婆さん。  
頑かたくなに神を信じるその姿は  
神秘的な静寂を内に秘めている。

おやおや 近所のおちびちゃん、  
なにやら楽しげに走り寄ってくる。  
私の駄洒落だじゃれに、おちびちゃん  
なぜだかニコニコ黙っている。

通りがかるは、呑んだくれの酔っ払い、  
すっかり出来上がって前後不覚の体。  
千鳥足で、よたよた、我が祖国くにの如く、  
その心と愚行は — 見せかけ。